

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Sound sequence in modern Japanese (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 洋, NAKANO, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001036">https://doi.org/10.15084/00001036</a>

# 現代日本語における音素連続の実態 (II)

## —品詞の分析—

中 野 洋

### 0. はじめに

先に、小論「現代日本語の音素連続の実態」(「電子計算機による国語研究 V」国研報告 49)に、電子計算機による新聞の語彙調査の全体の 1/3 のデータを使って、名語種におけるモーラ数、子音・母音の出現率、子音連続、母音連続について報告した。本論はその品詞編である。

語種と品詞との関係は、「電子計算機による新聞の語彙調査 (II)」(国研報告 38) 17 ページの「語種、品詞別の異なり語数分布」で、その大体を推測することができる。この表は一語に複数個の情報を持った語をもその調査対象としている点で、本報告のデータとは多少異なるが、そのあらまは次の通りである。本報告の分析対象とした品詞について述べると、接続詞、感動詞、連体詞はほとんど和語である。動詞、形容詞はほとんど和語だが、少数の混種語が含まれる(対する・役立つ・ダブるなどで 2% 余、余儀ない・愛らしいなどで 1% 余)。副詞は漢語(約、もちろんなど約 8%) 混種語(特に、決してなど 4%) を含む。純名詞、サ変語幹、形動名、非用言的接辞はそれぞれ半分以上が漢語であり、和語、外来語、混種語を含む。それぞれ、語種の持つ特徴に影響されていると考えられる。

小論「品詞認定の自動化」(「電子計算機による国語研究 III, 国研報告 39) において用いた品詞認定の方法の一つに、語形による認定している。この方法でかなりの語を処理することができるが、誤った認定も避けることができない。またこの延長として、品詞の認定を音韻論的な特徴によって行なうという方法が考えられる。これらを可能ならしめるためには、品詞の特徴を量的、質的に

とらえておく必要がある。これが、この調査を始めた一つの動機である。

### 調査に用いたデータ

新聞の語彙調査のデータには〔漢字かなまじりの見出し語〕,〔よみがな〕,〔情報〕,〔度数〕が磁気テープにはいつている。〔よみがな〕は数字,記号,英文字を除くすべての語に対し,ひらがな,カタカナでつけられている。本調査ではこの〔よみがな〕を使った。

まず,〔よみがな〕を音素表記にかえる。変換テーブルは表1に示す。変換は〔よみがな〕一字に対し音素一字をあてた。変換されたデータがこの調査のメインファイルとして使われる。(詳しくは,報告49の小論を参照されたい)。

また,このデータのうち,活用語は代表形(終止形)にまとめていない。したがって,「書か,書き,書く……」などはそれぞれ1レコードであり,異なり語数計算においてはそれぞれ異なり語数1として計算される。語尾変化を計量的にとらえるためである。

また,異表記同語の判別はおこなっていない。

次に,新聞の語彙調査のデータにつけられた品詞情報について述べる。

「電子計算機による新聞の語彙調査」(国研報告37)6~7,23~24ページに明らかなように,品詞情報は長単位処理され,異なり語になったデータについて,人手により付加情報の一部として入力された。文脈を持たない異なり語につけたという理由により,同形語の中の異語判別が不可能になった。その結果,同形異語のある語,たとえば,「かき」には,和語名詞,和語動詞,漢語名詞の三種類の情報をつけることにした。もちろん,長単位の範囲内で同形異語判別できる語,たとえば,「勉強し」の「し」は助詞ではなくて動詞であると判別できるので,これには一種類の情報しかつけない。このようにして,データの中には複数個の情報を持つ語が出来たのである。本報告における分析の対象としたデータにはこれらは含めなかった。そうすることによって,純粹にその品詞の特徴をとらえることができるし,いくつかのデータを除いても結果にはそれ

ほど影響を与えないだろうという見通しによったのである。品詞情報のつけ方は、大体は学校文法によっている。以下その分類基準と例を示す。

〔純名詞〕……活用しない。助詞をともなっているいろいろな格に立つことができる。特定の格に固定しない。いわゆる普通名詞である。〔問題・午後・事務・面接・委員〕

〔連用形転成名詞〕……動詞の連用形の形で名詞に使われた語である。〔ヤブ入り・破り・病い・山越し・遊び〕

〔サ変語幹〕……サ変動詞の語幹として使われた名詞である。「～する」の「～」にあたる語。ただし、それが一要素であるもの（感ずる・属する）などは除く。〔発表・通知・注目・実施・参加〕

〔形動名〕……いわゆる形容動詞の語幹部分。「大規模な」「おしゃれな」の「規模」「しゃれ」も含む。および、形容動詞の派生形である。〔明らか・必要・簡単・十分・完全〕

〔形容名〕……いわゆる形容詞派生形である。形容詞語幹に「さ・み・げ」がついたもの、語幹のみの用いられたもの。〔無・安・高さ・長さ・若さ〕

〔名詞性接辞、助数詞〕……他の語について用いられ、活用しないもの。〔者・お・的・第・区〕数詞について、単位や順位など表わすもの。〔日・円・時・月・年〕

〔数詞〕……漢数字、和語や外来語をあらわす語、不特定の数をあらわす語。〔一・二・三・万・五〕

〔固有名詞〕……人名、地名、およびそれを部分としている語。〔東京・日本・新宿・渋谷・大阪〕

〔代名詞〕……特定の話し手との相対的關係に応じて、いくらかの同じ概念をあらわす語の中から選ばれる、人や事などを指示的にあらわす語。〔私・これ・あなた・彼・われわれ〕

〔接続詞〕……語と語、句と句、文と文の關係をあらわす語。活用しない。〔では・そして・だから・または・それに〕

表1. よみがな音素変換テーブル

				唇音化音		非口蓋					
				半母音的唇音化音	半母						
					奥		舌			広	
					広口	狭口	半広口				
				-(w)a	-u	-o		-a			
	半母音	有声音	#-y-w-	わ wa	つ #u	お #o	あ				
口喉頭音	摩擦音	無声音	h-	フゝ hu*a	ふ hu	ほ ho	は				
軟口蓋	破裂音	有声音	g-		ぐ gu	ご go	が				
		無声音	k-		く ku	こ ko	か				
唇音	破裂音	有声音	b-		ぶ bu	ぼ bo	ば				
		無声音	p-		ぷ pu	ぽ po	ぱ				
歯・歯蓋茎音	破裂音	有声音	d-			ど do	だ				
	摩擦音		z-		ず・づ zu	ぞ zo	ざ				
	破裂音	無声音	t-			と to	た				
	摩擦音		c-		つ cu	つお cu*o	つぁ				
	摩擦音		s-		す su	そ so	さ				
唇音	鼻音	有声音	m-		む mu	も mo	ま				
歯・歯茎音	音		n-		ぬ nu	の no	な				
歯茎音	流音	有声音	r-		る ru	ろ ro	ら				

(注) ・小文字のアイウエオは\*a\*i\*u\*e\*oに変換する。

・拗ヤヨニはja je juに変換する。

・撥音んはNN

・捉音つはQQ

・長音符号ーは--

・を, ゐ, ゑはwo, wi, we

・カタカナ・ひらがなの区別はせず, 同じにあつかった。

\* この表は「国語国文学資料図解大事典」(全国教育図書K.K.)の58ページ上村幸

化音		口蓋化音				
音のない音				半母音的口蓋化音		
口	前舌			広口	奥	舌
	半広口	狭口	半広口		半広口	狭口
	-e	-i	(-j)e	-(j)a	-(j)o	-(j)u
#a	え #e	い #i		や ya	よ yo	ゆ yu
ha	へ he	ひ hi		ひゃ hja	ひょ hjo	ひゅ hiju
ga	げ ge	ぎ gi		ぎゃ gja	ぎょ gjo	ぎゅ gjju
ka	け ke	き ki		きゃ kja	きょ kjo	きゅ kiju
ba	べ be	び bi		びゃ bja	びょ bjo	びゅ biju
pa	ぺ pe	ぴ pi		ぴゃ pja	ぴょ pjjo	ぴゅ pijju
da	で de	ヂィ de*i				
za	ぜ ze	じ・ぢ zi	ジェ zi*e	じゃ・ぢゃ zja	じょ・ぢょ zjo	じゅ・ぢゅ zijju
ta	て te	ティ te*i				
cu*a		ち ci	チェ ci*e	ちゃ cja	ちょ cjo	ちゅ cijju
sa	せ se	し si	シエ si*e	しゃ sja	しょ sjo	しゅ cijju
ma	め me	み mi		みゃ mja	みょ mjo	みゅ mijju
na	ね ne	に ni		にゃ njja	にょ njjo	にゅ nijju
ra	れ re	り ri		りゃ rja	りょ rijjo	りゅ rijju

雄執筆の部分をもとにし、一部をつくりかえたものである。

(感動詞) ……感動の表出・応答・あいさつに用いられる語。〔あゝ・おはよう・ほう・さらば・おやおや〕

(副詞) ……主に用言と修飾する。ある種の副詞は他の副詞や名詞を修飾する。活用しない。擬声語・擬想語はこれに含む。〔また・いま・よう・どう・よく〕

(連体詞) ……体言を修飾する機能だけを持つ。活用しない。助詞、助動詞をとみなわない。〔わが・おおきな・その・どの・こんな〕

(動詞) ……動詞型の活用をする(終止形がウ段で終る)。連用修飾をうける。主に動作、作用、存在をあらわす。〔する・なる・いう・つく・有る〕

(動詞性接辞) ……他の語について、ある意味を加えたり、名詞について動詞化したりする語。動詞型の活用をする。〔すぎる・合う・はじめる・かける・たす〕

(形容詞性接辞) ……他の語について、ある意味を加えたり、名詞について形容詞化したりする語。形容詞型の活用(終止形がイで終る)をする。〔やすい・にくい・がたい・易い・強い〕

(形容詞) ……形容詞型の活用(終止形がイで終る)をする。連用修飾をうける。主に事物の性質や状態をあらわす。〔多い・強い・新しい・早い・広い〕

(助動詞) ……「現代語の助詞・助動詞」(国研報告3)に助動詞と定めた語。形容動詞の語尾部分。〔に・で・た・なれ〕

(助詞) ……「現代語の助詞・助動詞」に助詞と定めた語。〔の・を・に・は・が〕

(算用ローマ数字) ……算用数字・ローマ数字。〔0, 1, 2, 5, 3〕

(記号) ……いわゆる記号。〔, . . [ ]〕

(品詞不明) ……品詞が決められない語。

(情報無視) ……漢字のルビなど。

## 1. モーラ数の調査

ここでいうモーラ数とは、ここで用いる音素において、「子音音素と短母音音

素との連結,あるいはそれに等しいながさを有する音素連結」(国語学辞典「モーラ」服部四郎執筆)の数をいう。

(のべ) 図1は各品詞におけるモーラ数別頻度数の割合をグラフに示したものである。これを見ると,各品詞が三つのグループに分かれることがわかる。1モーラの多い,助詞,助動詞,2モーラが最も多い感動詞,連体詞,3~4モーラが最も多い純名詞・サ変語幹・形容詞・副詞・動詞の三グループである。この中で,形容詞は5,6モーラの語も多く,グラフもなだらかな山状になっている。

三グループの分類は,表2に示す相関行列表\*においてもこれを裏づけることができる。これは,モーラ別頻度数分布の各品詞間の相関を示すものである。多くは正の値を示している。これによればサ変語幹・形容詞・形動名・固有名詞・純名詞・副詞はそれぞれ互いに0.7以上の高い相関を示している。特に接辞類を除いた名詞類が0.9以上の相関を示しているのは興味深い。形容詞はこの中で,図1のグラフからもわかるように,相関値0.8~0.7台と少し低い。次に,連体詞・動詞・接続詞・感動詞・名詞性接辞は,動詞と感動詞との相関が0.69なのを除くと,それぞれ0.7以上の値を示す。また,助動詞と助詞は0.98の相関を示し,サ変語幹のグループとはそれぞれ0.1未満の相関を示す。

(ことなり) 図2も図1と同様のグラフである。これを見ると,3,4モーラの多い純名詞・サ変語幹・副詞・動詞・形容詞,2,3,4モーラ共に多くなだらかな曲線を描く感動詞・連体詞,2モーラが多い助動詞・助詞の3グループに分けることができる。このうち,形容詞の曲線は3,4モーラを頂点としているが,5,6モーラも多い曲線を描く。「のべ」と比べて曲線の分類がきれいになってい

\* 相関行列表は次式によって求めた。計算はHITAC-8250,統計計算ライブラリHSAPを用いた。以下相関行列表は同じ。

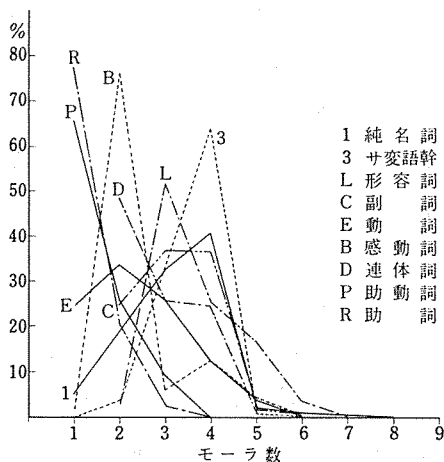
$$r_{jk} = \frac{\sum_{i=1}^n (X_{ij} - \bar{X}_j)(X_{ik} - \bar{X}_k)}{\sqrt{\sum_{i=1}^n (X_{ij} - \bar{X}_j)^2 \sum_{i=1}^n (X_{ik} - \bar{X}_k)^2}}$$

ただし, n: サンプル数(モーラ数,各子音,各母音など)      x<sub>ij</sub>: データ  
 m: 変数の個数(各品詞)       $\bar{x}_j$ : 平均  
 j=1, ……m      k=1, ……m       $\bar{x}_k$ : 平均



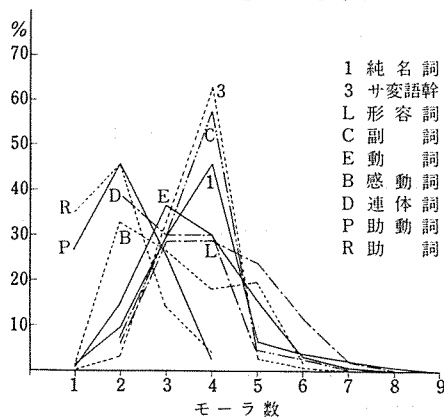
るのは、この現象が単語の使用率とは関係が薄いことを示している。表3の  
 相関行列表ではこの分類がもっとはっきりと出ている。サ変語幹・形動

図1. モーラ数・のべ



名・純名詞・形容詞・固有名詞・  
 副詞・接続詞・動詞、感動詞・連  
 体詞、名詞性接辞・助動詞・助詞  
 の三グループはそれぞれのグルー  
 プ内での相関は0.7以上、サ変の  
 グループは感動詞のグループとは  
 ほとんど0.4以上、助詞のグルー  
 プとはほとんど0.1未満、感動詞  
 のグループと助詞のグループは  
 0.4以上の相関値を示す。

図2. モーラ数・ことなり



## 2. 子音の調査

後に述べる語頭子音と異なり、  
 品詞のグループ分けができるよう  
 な特徴はみられない。このことは  
 また、品詞のグループ分けと子音  
 の頻度とは直接の関係がないこと  
 を示す。相関行列表でも、各品詞  
 間の相関は0.7以上が多く、それ

以下の低い相関もグループ分けできるような規則性は認められない。

しかしながら、表4子音出現率分布表（ことなり）をみると、次のような傾  
 向が読み取れる。動詞・形容詞と他の品詞を比べると、Z・P・Nが少なく、W  
 が多いことがわかる。これは、和語の特徴を示している。また、形容詞には、



表 4 子音出現率分布表 (異なり)

表中 ( ) 内数値は語頭子音

子音	純名	サ変	形動	接辞	固名	形容	動詞	副詞	助動	助詞
#	13.7 (9.3)	21.3 (6.3)	18.4 (11.7)	15.4 (6.6)	14.5 (15.1)	20.3 (27.2)	13.2 (20.2)	8.1 (11.9)	8.6 (0.8)	7.7 (1.6)
W	0.5 (0.6)	0.4 (0.1)	1.3 (0.7)	0.7 (0.7)	1.5 (0.7)	2.3 (2.8)	2.3 (1.4)	0.9 (1.3)	(0)	1.3 (1.6)
Y	1.8 (3.1)	1.6 (2.8)	3.0 (4.9)	1.7 (2.6)	3.6 (6.0)	3.7 (6.7)	2.1 (4.2)	1.9 (2.8)	3.6 (7.6)	3.0 (5.6)
H	4.4 (9.5)	4.0 (11.5)	3.9 (11.8)	2.9 (6.3)	4.2 (9.9)	2.9 (10.9)	3.8 (12.0)	3.7 (9.2)	0.4 (0.8)	3.0 (4.0)
G	3.2 (3.8)	2.5 (3.5)	2.6 (3.1)	5.1 (9.7)	3.0 (1.9)	2.7 (0.1)	3.6 (0.4)	3.4 (6.2)	1.8 (3.1)	2.6 (3.2)
K	12.1 (17.0)	14.7 (21.0)	15.7 (19.0)	13.1 (14.9)	12.1 (15.5)	20.9 (15.8)	14.3 (14.6)	11.0 (9.8)	6.1 (1.5)	12.4 (13.7)
B	3.2 (4.3)	1.9 (3.2)	2.2 (3.3)	3.7 (7.2)	2.7 (2.6)	2.0 (0)	2.3 (0.5)	3.3 (4.3)	1.4 (3.1)	3.0 (4.0)
P	1.4 (1.6)	0.8 (0.4)	0.9 (0.3)	1.1 (0)	0.6 (1.0)	0 (0)	0 (0)	2.0 (4.1)	(0)	0 (0)
D	2.6 (3.5)	1.7 (2.7)	2.3 (2.9)	2.6 (5.2)	2.6 (1.7)	1.3 (0.7)	2.2 (1.4)	3.2 (4.6)	8.6 (13.0)	9.0 (7.3)
Z	3.8 (5.1)	3.3 (6.1)	4.6 (4.9)	4.8 (9.4)	3.9 (2.1)	1.8 (0.1)	2.0 (0.4)	4.6 (6.5)	3.6 (6.1)	3.9 (4.8)
T	5.1 (6.8)	4.5 (8.5)	4.8 (7.6)	4.8 (5.5)	5.8 (9.1)	4.8 (6.3)	6.1 (10.1)	11.0 (8.3)	7.9 (13.0)	6.4 (8.9)
C	2.6 (3.2)	5.0 (4.3)	3.9 (1.3)	4.1 (3.6)	3.8 (2.8)	2.5 (5.2)	4.3 (5.8)	4.0 (4.3)	0.4 (0.8)	2.1 (1.6)
S	11.2 (16.4)	10.9 (20.6)	9.0 (15.2)	8.4 (12.7)	9.7 (12.4)	14.5 (10.1)	10.4 (10.1)	7.5 (12.3)	14.0 (13.7)	5.2 (8.1)
M	3.9 (5.4)	1.9 (2.8)	5.1 (8.0)	4.9 (5.2)	7.7 (10.1)	5.6 (7.1)	8.7 (10.8)	5.8 (7.1)	4.3 (8.4)	8.2 (8.9)
N	8.9 (3.9)	10.4 (2.8)	10.4 (2.5)	9.4 (2.6)	9.6 (5.4)	5.4 (6.8)	5.9 (8.1)	11.1 (6.8)	11.1 (18.3)	17.6 (23.4)
R	5.8 (4.1)	3.7 (3.6)	5.0 (2.8)	8.1 (3.5)	8.3 (3.1)	6.8 (0)	13.9 (0.1)	10.7 (0.3)	19.0 (9.9)	9.9 (0.8)
J	6.9 ( )	8.2 ( )	4.4 ( )	5.2 ( )	2.2 ( )	0 ( )	0.2 ( )	1.7 ( )	4.3 ( )	1.7 (1.6)
その他	7.9 (2.3)	3.2 (0.2)	2.4 ( )	3.4 ( )	4.1 (0.6)	2.3 ( )	4.6 (0)	6.3 (0.1)	5.1 ( )	2.8 (0.8)
総度数	98034 (22779)	7825 (1960)	3080 (796)	4136 (1864)	44533 (11429)	2777 (672)	17037 (4794)	2528 (675)	279 (131)	233 (124)

表内 総度数を除く数値は百分率

表5. 相関行列表

語頭子音・ことなり

◎ 0.7以上  
○ ~0.4  
△ ~0.1  
× 0.1未満(含負値)

純名詞	◎																			
サ変語幹	◎	◎																		
形動名詞	◎	◎	◎																	
固有名詞	◎	◎	◎	◎																
名詞性接辞	◎	◎	◎	◎	○															
副詞	◎	◎	◎	◎	◎	○														
形容詞	○	○	○	◎	△	◎														
動詞	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎													
連体詞	○	○	○	○	○	△	○	◎	◎											
感動詞	○	△	○	○	△	○	◎	◎	◎											
接続詞	○	○	○	△	○	△	△	△	△	△										
助動詞	△	△	△	△	×	△	×	×	×	×	○									
助詞	△	△	△	△	△	○	△	×	×	×	△	○								
	純名詞	サ変語幹	形動名詞	固有名詞	名詞性接辞	副詞	形容詞	動詞	連体詞	感動詞	接続詞	助動詞	助詞							

る。同じようなことは、連体詞・感動詞・接続詞にも言えるが、その分布のかたよりは、助詞・助動詞と違って、他の品詞の結果とそれほど大きくは変わらないように思われる。

助詞・助動詞以外のグループは名詞のグループとそれ以外（動詞・形容詞・副詞）のグループに分けることができる（連体詞・感動詞・接続詞は語数が少ないので除く）。その最も大きな特徴はRが名詞以外のグループに少ないことである。また、名詞以外のグループには、#が多く、G・B・Zが少ない（副詞は例外）。副詞が例外になるのは、そこに漢語や擬声語擬態語が多く含まれ、それが動詞や形容詞の分布の異なるためであると思われる。動詞と形容詞の分布は互いによく似ているが、副詞や連体詞・感動詞・接続詞と異なる特徴をこの表から取り出すことはできない。

以上のような分類（助詞・助動詞・名詞類・それ以外）は表5相関行列表（語頭子音・ことなり）からも推測することができる。また、この分類を $\chi^2$ 検定にかけると、危険率1%で有意差が認められる。

### 〔子音連続〕

子音連続とは単語（短単位）の中の母音（または、Q, N）をはさんだ子音の連続をいう。図示すれば下のように—で結ばれた子音の連続である。

#ATAMA KANNKIJO#U

以下では、サ変動詞の語幹、動詞、形容詞、副詞について調べた結果\*を報告する。

\* この調査のデータはのべ数集計である。

〔総計に対する割合が2%以上の子音連続〕

サ変語幹 J#, K#, SJ, T#, S#, K#, #S, KN, NJ

動詞 SR, ##, #R, KR, NR, #K, NQ, MR

形容詞 S#, ##, SK, K#, #K, RS, R#, YK, #T, CY, KK, KR

副詞 KN, SR, QT, TK, RH, YK, RN

サ変語幹では、# が後に来る連続 (J#, T#, S#, K#), J が後に来る連続 (SJ, KJ), N が後に来る連続 (KN), N が後に来る連続が多い。これら四つのタイプの連続をすべてをあわせると、全体の65.5%に達する。これは漢語の特徴と等しい。子音連続J#, K#, SJの順位も漢語と同じである。サ変語幹の大部分が漢語であるためである。子音連続について、サ変語幹となる漢語と他の漢語との異なる特徴はないといえる。

動詞では、R が後に来る連続 (SR, #R, KR, NR, MR), # が後に来る連続、K が後に来る連続 (#K), Q が後に来る連続 (NQ) が多い。これら四つの連続すべてをあわせると、全体の61.2%に達する。このうち、R・Q が後にくる連続が多いのは活用語尾の影響であるとおもわれる。

形容詞では、# が後に来る連続 (S#, ##, K#, R#), K が後に来る連続 (SK, #K, YK, KK), S が後に来る連続 (RS) が多い。これら三つのタイプの連続をすべてあわせると、全体の65.8%に達する。これは形容詞の活用語尾の影響であるとおもわれる。また、連続の型は理論上では、441通りあるが、形容詞はこのうち、243通りしかない。連続のパターンが比較的少ないといえる。

副詞では、N・K・T・R が後に来る連続が多く、これらをすべてあわせると、全体の51.1%に達する。

### 3. 母音の調査

品詞をグループ分けできるような、顕著な差異は認められない。

動詞に促音Qが多いのは活用語尾(連用形)の影響だと思われる。形容詞にはAが多く、Eが少ない。副詞には促音Qが多いのは擬声語・擬態語の影響だと思われる。(表6. 母音出現率分布表・ことなり参照)

〔語尾母音〕

表7. 語尾母音出現率分布表(のべ)\*を見ると次のようなことがわかる。名詞類には撥音(N)が多いことは他の品詞と著しく異なる点である。ただし、固有名詞にはA・Oが多く、形動名にはAが多いことは、それ以外の名詞類と異なる。

表6 母音出現率分布表(ことなり)

母音	純名	サ変	形動	接辞	固名	形容	動詞	副詞	助動	助詞
A	16.3	14.0	22.7	19.4	26.5	31.8	28.1	25.2	32.6	30.0
E	9.0	9.3	10.4	8.9	7.3	3.5	10.0	6.3	17.2	14.2
I	22.4	24.4	22.0	25.4	23.2	28.4	19.4	24.5	16.1	13.3
O	15.2	14.2	12.2	15.5	17.2	13.3	14.9	19.0	12.2	30.9
U	21.9	26.1	21.7	20.2	18.1	20.1	21.5	14.2	16.5	7.7
N	8.8	8.8	8.5	7.3	4.5	0.3	1.5	4.5	0.7	1.7
Q	1.8	2.6	1.9	1.0	0.7	2.3	4.3	5.4	4.3	1.7
—	2.7	0.4	0.5	0.6	2.1	0	0	0.7	0.4	0.4
総度数	90549	7825	3080	4136	44532	2777	17037	2528	279	233

表内 総度数を除く数値は百分率

表7 語尾母音出現率分布表(のべ)

母音	純名	サ変	形動	接辞	固名	形容	動詞	副詞	助動	助詞
A	9.5	5.8	19.2	7.7	30.4	0.4	10.9	12.8	42.1	26.0
E	2.6	0.7	3.4	1.5	3.6	0.3	6.8	12.8	20.4	26.8
I	25.4	30.8	20.7	32.0	21.5	64.1	31.0	32.6	15.0	12.1
O	8.4	3.9	3.6	7.8	13.4	0.3	0.9	18.1	2.2	34.6
U	35.9	43.0	38.8	25.5	21.9	32.2	35.4	20.9	16.2	0.1
N	16.9	15.6	14.4	25.3	8.0	0	1.9	2.6	1.2	0.4
Q	0.1	0	0	0.3	0	2.7	13.0	0.2	3.0	0
—	1.3	0.2	0	0	1.3	0	0	0	0	0
総度数	220700	7371	3262	69446	55683	4061	34905	5566	18892	24484

表内 総度数を除く数値は百分率

\* この表は品詞ののべ数によって作られているが、品詞分類のためにはのべよりことなりのデータの方が有効である。品詞別語彙表(報告38)を参考にして、表中の数字を解釈する必要がある。



動詞の母音連続の特徴は、U が後に来る連続 (UU・AU・IU) が多いことである。それだけで、全体の 31.3% をしめる。AQ のように、Q が後に来る連続が多いことも、他の異なる点である。U が後に来る連続は必ずしも動詞の語尾だとはかぎらない。次の例は語頭からの連続の例である。

UU ウツル、ツウズ、ツヅク、ウルホウ、クユラス、ウツ、ツム、フク

AU アルク、ハズス、ナグル、カクレル、

IU ミツカル、ミクラベ、シズマル、イブカル、イツワル、

AQ は語尾が多い。

形容詞の母音連続は AA・II・OO・UU と同じ母音の連続の型が多いこと。5% 以上の母音連続の合計が 57.3% と全体の半分以上を示める、つまり、ある母音連続の型に集中しているということが特徴といえよう (理論上可能な連続の型 64 のうち 1% 以上の連続 17)。I が後に来る連続は全体の 38.9% をしめる。これは語尾の影響であるといえよう。もちろん、語頭、語中にくる例もある (イチジルシイ、イキオイヨク、チイサク)。

副詞の母音連続は 5% 以上の連続が四つ (合計 32.7%) しかないことからもしれるように、母音の型がいろいろあり、その頻度も全体にちらばっていることが特徴といえる (理論上可能な連続の型 64 のうち 1% 以上の連続 30)。また、和語の特徴である AA・AU、漢語の特徴である OU が共に 5% 以上あることからわかるように、漢語と和語の特徴をあわせもっているといえる。

#### 4. ま と め

以上、現代日本語 (新聞に用いられた単語・短単位) を品詞別に見た時、次のことが明らかになった。

##### 1) モーラ数について

のべで、1 モーラが多い助詞・助動詞、2 モーラが多い名詞性接辞・感動詞・接続詞・動詞・連体詞、3・4 モーラが多いサ変語幹・形動名・固有名詞・純名詞・副詞の 3 グループに分けることができる。



ことなりで、2 モーラが多い助詞・助動詞・名詞性接辞、2・3 モーラが多い感動詞・連体詞、4 モーラが多いサ変語幹・形動名・純名同・固有名詞・形容詞・動詞・副詞の3 グループに分けることができる。

## 2) 子音について

名詞類に漢語の特徴が、動詞・形容詞に和語の特徴が見られる。

動詞に R, 形容詞に S・K, 副詞に T が多い。これは語尾の影響であるとおもわれる。

## 3) 語頭子音について

助詞・助動詞とその他に分けることができる。その特徴は助詞・助動詞に N・D が多く、# が少ないということである。また、その他は名詞類と動詞・形容詞・副詞に分けることができる。その特徴は動詞などに、R が少ない、# が多く、G・B・Z が少ないということである。

## 4) 子音連続について

サ変語幹は漢語の子音連続の特徴を持っている。動詞は R・#・K・Q が後にくる連続が多く、R・Q の連続は活用語尾の影響である。形容詞は #・K・S が後に来る連続が多く、これは活用語尾の影響である。

## 5) 母音について

品詞をグループ分けするほどの顕著な差異は認められない。動詞に Q が多く、形容詞に A が多く、E が少ない、副詞に促音 Q が多いのが他と比べてわかる。

## 6) 語尾の母音について

名詞類に撥音 N が多く、固有名詞に A・O が、形動名に A が多い。動詞に促音 Q, E が多く、形容詞に I が多く、副詞に O・E が多い。他と比べてみてわかる。

## 7) 母音連続について

サ変語幹は漢語の特徴をもつ。動詞は U が後に来る連続が多い。Q が後に来る連続が多いがこれは語尾の影響である。形容詞は母音連続のパラエティが少

ない。I が後に来る連続が多いがこれは語尾の影響である。副詞は和語と漢語の特徴をあわせもち、母音連続のバラエティも多い。

子音・母音やその連続について品詞別に見たが、そこから出た結果は、現段階では品詞個有の特徴というより、語種の特徴の反映であることが多い。ただ、活用語の語尾や副詞の擬声語・擬態語の特徴は明らかに見られた。次の機会には、個々の例をとりあげてのより詳しい分析を試みてみたい。また、本報告の相関値の計算を含め、「音素連続の統計的分析」についても別の機会に詳しく述べたい。

(49. 10. 31)